

追憶ついでおく

地球を発つ恋人へ

そんなに遠くへいけば
あなたは わたしのことを忘れるわ
そんなに長い時間がたてば
あなたは わたしのことを忘れるわ
だからいけないで ここにいて
ここにいて



帰郷

帰ってきたのだけれど
だれも迎えてくれるものはいません
帰ってきたのだけれど
わたしを待つといってくれた
少女はもういません
野辺には白い花ばかり
少女の墓すら見えません
わたしの家も少女の家も
花の中にうずもれて
野辺には風の音ばかり

わたしは帰ってきたのです
遠いきらめく宇宙から
緑と風のふるさとへ
それなのにこの世界には
本当にたれもないのです
思い出ばかりが草の間を駆けぬけてゆきます



船出

もちろんあなたは知っている

（やさしく）

こういうことはわかしかるくりが裏されてきた
別れるために

さかすかしく忘れるために
船出した多くの少年の魂をもつ者どもよ

白きと黒き星の海はしるし
船は宇宙の海を走り
波は宇宙の海を走り
何にかわけがあらう
昔、太平洋を渡った船
その銀色の宇宙船と

もちろんあなたは知りやしない
はくちの星は暗い夜も
はくちにははくちの星は

あはれにしない
まがと目と涙の流の中
と目と多くの涙の中
夜と夜と星はしるしを
あなを見るはくちの夢が
夢のように 宇宙を渡るか

思いはいつも変わらない
いつものときも同じように
はくち船出をしたのた

恋人へ

遠い宇宙の星まで
 わたしはあなたに手紙を寄ります
 またわたしを 待つていてくれていますか
 またわたしを 愛してくれていますか
 この手紙も あなたのもとへはとどかない
 古い通信筒にいられてあなたの住所を
 かくつくりませんか
 もしあなたがいる地球へゆく船は出ないのです
 残された時間しむすかです

どうぞ わたしを忘れたら
 幸福な結婚をしてくださ
 せしてしあわせになつてくだ
 さい
 それからわたしを思い出の中へ
 再びあつてくだ
 さい
 もし地球へ出る船はないのです



別れ

ぼくの父は
 船乗りだったと 母がいつていました
 遠い星ほしへ船出したきり
 帰ってこなかったと
 母は未婚の婦人になり
 ぼくを産んで育てましたが
 ぼくが船乗りになる決心をしたときに
 はじめて父のことを話してくれました
 もう死んでしまったに
 ちがいない と 歌うように
 でもぼくは おかしな話だけど
 どこかに ぼくに似ているという
 ぼくの父が生きてる気がしてならない



ぼくが出立する日 母は
 どうして二度もこのように
 別れなければならぬのかと
 泣きました
 ぼくは別れにはならない
 なせならきつと帰ってくるからと
 約束しました
 きつと帰るつもりです

手紙

その青い通信筒は その星の
すっかり荒れはててしまった
ドームの床下にありました

あなたの名と
あなたの住所がかかれてありました

悪い病氣と不運な事故が
彼らをその星に孤立させてしまったのです
長い長い静寂の訪れ

おかあさん
おとうさんが宇宙から出した
あなたあての手紙です

おかあさん
あなたの石碑の下 草の下に
この通信筒を埋めます
おとうさんからの手紙です



追憶

あなたかわたしを思ひながら
わたしのことを思ひ出し、あられ
わたしのために夢を
建てておくれ
わたしのことを
語っておくれ
そうして
わたしの
あはれはひとりで
眠る
たつたひとりで
あはれを
手の誰り
すへて
追憶のうらに